

Happy?

秋乃

「もう……少し」

僕はシワ一つ無い真っ白なテーブルクロスの手端をつまんで、テーブルの両脇から垂れ下がる裾の幅が均一になるように方向を直した。

これで三度目。キミには少々神経質過ぎると笑われるかもしれないけれど、今日は神経質すぎるくらいで丁度いい。

「よし」

エプロン姿の僕は、小さく自分に言い聞かせるように呟いた。

一週間前から計画してきた集大成が目の前に迫っているのだ。僕は自分が会社の下手なプレゼンなんかよりも緊張しているのが分かった。

ふと壁に掛かった時計に目をやれば、長針と短針が仲睦まじく寄り添っていた。

それを見て僕は焦る。

先程キミから送られてきたメールを読んでから、およそ十分。ずっとテーブルクロスと格闘していたせいで、その他の準備がまったくといっていいほど終わっていなかった。

「やば——」

慌てて食器棚へと駆け寄った僕は、隣のトースターの乗ったキャビネットの角に、したたかに足の小指をぶつけた。

「〜〜っ！」

声にならないうめき声を上げてうずくまった拍子に今度は食器棚の角にごつんと頭をぶつけ、鈍い音が一人きりのダイニングに響いた。

花火のように火花が瞼の裏で瞬いた気がしたが、次の瞬間にはぶつけた箇所^{箇所}に頭の中の泉からじわじわと鈍い痛みが湧き上がってきて、視界に映る床の板目が涙でぼやけた。

「……痛い」

それはそうだろう。

僕はゆっくりと座りこむと、先日買ったばかりの食器棚に背中を預けて、額を手で覆った。どうやらこぶ^{こぶ}になってしまっているみたいだ。

ぼんやり痛みを堪えながら、僕はさっき見たメールの内容を思い出していた。

『今、いつもの酒屋さんで予約してたボジョレー・ヌヴォー受け取ったよ！ 今年是一段と美味しいらしいね。んー楽しみ。今晚君が帰ったら一緒に飲も(>__>)』

僕がまだ会社にいると思っているキミから顔文字付きのそんなメールを受け取った時、僕は密かにガッツポーズしていた。

いつも利用しているワインの品揃えがいい酒屋さんからだと、電車に乗って、その後駅からここまで歩くとしたら、君の足で十五分は掛かる。

料理は全部出来ているし、あとはお皿を並べるだけだ。十五分もあれば、準備は簡単に終わるからね。

朝、『ワインを買ったら連絡を下さい』とキミに言ってあったのが功を奏した……で意味は合っているよね？

そんな事を考えていたら急に下にテーブルクロスを敷きたくなって、気がつけばキミが帰ってくるまであと五分もない。

どうしていつも、こうギリギリになってしまうのかな。

キッチンの方からは、食欲をそそるいい匂いがここまで漂ってきていた。

弱火でことごと煮込んでいるのは、僕の故郷ブルゴーニュの郷土料理。牛肉を赤ワインで煮込んだ、フランスの伝統的な家庭料理でもある。

キミは僕の料理の腕を随分と甘く見ているようだけど、それはまだ僕が日本の料理や食材に慣れていないから。そのうち和食もこっそり勉強して作ってあげようと思っているのだけれど、これはまだ内緒だ。

料理に合わせるワインはもちろん本場のブルゴーニュワイン！ ……が本当はいいのだけれど、今日は毎年恒例ボジョレーの解禁日だからしょうがないか。

まったく、こんなイベント事なんかはしっかり覚えているくせに……。

『知ってる？ ボジョレー・ヌヴォーの《ヌヴォー》って一番目のとか初

めてのって意味なんだよ！』

「初めての……ね」

メールの最後にそう書いてあったけれど、もちろん僕は知っている。日本でもよく使われるフランス語は、だいたい調べたから。

でも正確には同じくワインで使われる事が多い《プリムール》って言葉が初めてという意味で、《ヌヴォー》は新しいって意味なんだけど。

でも君は学校でフランス語を専攻していたはずだから、きっとこのメールはわざと。

キミはある程度流暢に日本語を話せるようになった僕を時々こうやってからかうけど、キミともっとたくさん話すために、僕は日本語を必死で勉強したんだ。

フランス語には、帰ってきた人を迎える言葉が無いから。

数年前、言葉も空気もまだ馴染めず、たどたどしい日本語で懸命に話す僕に、キミは太陽みたいな笑顔をくれた。

僕からも「知ってる？」って聞こうか。

僕がキミに惹かれた理由。

「お皿並べなきゃ……」

腫れているおでこをさすりさすり、僕は二人分の食器やグラスを並べ、用意していた季節はずれの黄色い造花を一輪、透明な花瓶に挿してテーブルの真ん中に置く。

「これでよし」

満足げに僕はディナー会場を見下ろした。

全部の準備が終わって、後はキミが帰ってくるのを待つだけだ。

と、

「ただいまー。なんだ、先帰ってたんだ？」

曇りガラスをはめ込んだ仕切り戸の向こう側から、玄関のドアを開ける音と一緒に、鈴を転がしたようなキミの声が聞こえた。

僕はエプロンを外して棚に掛けると、戸を開け、ドアを閉めたキミがブ

ーツを脱いでいる玄関へと向かう。

「じゃーん！ ワイン買ってきたよー」

僕を見て、高らかに戦利品を掲げるキミのほがらかな笑顔は、まるでひまわりの花。

キミを見ていると思い出すんだ。故郷の香りを。風を。一面に広がるブルゴーニュのひまわり畑を――。

「どしたの？」

不思議そうにキミは首を傾げる。

うつるんだよ、キミの笑顔は。

「なんでもない」

自然と笑みが零れてくるのを感じながら、僕は実感しているありったけの幸せを込めてキミに言った。

「おかえり。お誕生日おめでとう」